



菅波 茂 99

アフガニスタンから内戦中のタリバンとラバニの両グループが前後してやってきた。タリバンは現在内戦中のアフガニスタンの90%の国土を実効支配しているイスラム原理グループである。保健大臣と医療局長と2人の地区保健責任者の計4人である。

AMDAは現在タリバン支配下にあるアズローという人口1万6000人の町の病院と保健センターの再建を国連難民高等弁務官事務所と連携して担当している。この保健・医療プロジェクトの目的はパキスタンの国境の町であるペシャワールにいるアフガン難民の帰還を促進するための整備事業で

ある。保健大臣はウツラーという称号を持つ聖職者である。42歳。笑うと、いかつい顔が子供のようには無邪気になる。

アフガン支援

一方、前政権派のラバニグループからは外務副大臣が1人来た。2年前のアフガニスタン北西部を襲った大地震の時にAMDAチームは彼とともに救援活動を行った。39歳の眼科医である。平和になれば、臨床に戻り患者さんの治療をしたいとのことであった。

保健医療機関は20年間に及ぶ内戦により、80%以上が崩壊している。特に手術などができる第2次病院は医療機器や薬品の不足で稼働していない。手術が必要な重傷者は隣国のウズベキスタンやパキ

スタンの病院に転送している。実際に乳幼児の死亡率や出産時妊婦死亡率は悲惨な数字であった。その他のアジアやアフリカの国々に比較しても最低の状況である。両グループともに保健医療行政担当者はない。彼らの中で悪戦苦闘している。彼らはアフガニスタンで今必要とされている医療内容を教えてくれた。

日本がアフガニスタンの人たちに支援できることは多い。AMDAは両グループに対して直接彼らの保健医療を支援することを決定した。

直接に顔を見ながら話し合うことでわかることが多い。彼らの素朴さ、純粹さ、熱意、さわやかさなど。この8月に30年ぶりにカブールを訪れることができるのも楽しみである。

(アジア医師連絡協議会代表、
題字は筆者)